北澤毅・古賀正義 編著

『質的調査法を学ぶ人のために』

世界思想社 2008 年 四六判 280 頁 ￥2310(税込)

鶴田真紀

質的調査法は，社会調査法としての市民権を獲得し「身近に利用可能な」手法となった一方で,「いかなる意味で〈質的〉であるのか」がこれまで以上に問われている。このような質的調査法をめぐる現在の状況こそが，初学者に「データ収集の容易さと分析の困難」(p.257) をもたらしているように思われる。

本書は，初学者が抱えるこのような困難を解決する導きの糸を提示するものである。しかしながら，質的データを手に入れさえすればそれを論文化するための方法(ノウハウ)を教えてくれる, いわゆる「ハウツー本」としての役割を本書に期待してはならない。本書が提示するのは，各執筆者が本書に込めた「導きの糸」をまさにそれとして読み解くことのできる力，すなわち質的調査法を実践するための方法的意識であり，思考であり，態度なのである。卒業論文や修士論文で質的調査法を実践したいと思っている初学者から，本書は「『質的調査法を（これから）学ぶ人のために』ではなく，『(ある程度）学んだ人のために』では」と評されることがあると聞くが，その理由はこのような点にあるのかもしれない。だが，本書における〈質的〉研究とはいかなるものであるのかを読者として探求することこそが，質的調査法を実践する近道なのではないだろうか。

本書の構成は次のとおりである。

第Ⅰ部「質的調査の目的と方法」では，第1章で質的調査の歴史的経緯が，第2章で質的調査の思考法として，とくに問題関心と方法論的関心や調査手法とが分かちがたく結びついていることが，第3章では質的調査の各手法おけるデータの特質が論じられる。

本書は質的調査法の優れた「実践書」でもあり，第Ⅱ部（第4章―第9章）では質的調査法の多様な応用と展開が提示される。しかしながら紙幅の都合上，本書の編者でもある本学科北澤毅教授の執筆した第7章についてのみ言及することにしたい。「少年非行の研究法」と題された本章では，「少年非行が凶悪化している」根拠として利用される公式統計は，はたして「客観的現実の反映」であるのだろうかと問われる。それは初学者にとっては衝撃的な問いであるにちがいない。というのも，統計データから「凶悪化」を認め，その原因と対策を提案する研究手法では前提とされ,「問い」として成立することすら閉ざされていたことこそを問うのである。読者は本章を通して上記の問いがもつ意味とその可能性（それは社会構築主義的な実証研究の可能性でもある）を知ることになるだろう。

第Ⅲ部では，心理学，社会学，教育社会学の研究者による座談会を通して質的調査について議論される。このような試みは，本書の「前作」ともいえる『〈社会〉を読み解く技法―質的調査法への招待』（北澤毅・古賀正義編，福村出版，1997 年）においても実施されていた（ただし前作では教育社会学者らによる座談である)。座談会の実施に限らず，本書は前作の重要な流れを受け継いでいる。最後にその点について述べることにしたい。

それは第1には,〈教育〉を，さらには〈社会〉を読み解くための技法として質的調査法の習得をめざしている点であり，第2には，社会構築主義とエスノメソドロジーという明確な立場に基づいて質的なデータへの接近を試みている点である。もちろん，それら二つの立場に基づく研究のみが質的調査法の「すべて」ではない。しかし，そのような明確さは，質的調査法を網羅しようとする発想それ自体の不毛さと同時に「あなたの問題関心にとって必然的に要請される調査手法は何か」を一貫して読者に問い続けているように感じられるのである（cf. 本書「あとがき」)。本書は「質的調査法を学び続けるすべての人ために」ある。